呼ばれていたので「新大橋」と名づけられたという。この橋は、歌川広重の『名所江戸百景』にも描かれているが、当時は、現在より200メートルほど下流にかかっていた。ちなみに広重の新大橋の絵は、後年、オランダの印象派の画家ゴッホが模写をしたことでも知られている。

新大橋のたもとには、御船蔵跡の碑が立っている。御船蔵は、幕府の艦船を保管する倉庫。新大橋と両国橋の間の隅田川沿いに、大小14の棟が並んでいた。

▲御船蔵跡の碑

七 芭蕉庵史跡展望庭園

隅田川を見つめる芭蕉像

新大橋のたもとにある「隅田川テラス」入り口の階段を下り、隅田川沿いを歩いていく。隅田川と小名木川の合流点付近まで行くと、堤防の上に大きな芭蕉像が見えてくる。芭蕉庵史跡展望庭園だ。

石段を上って園内に入ると、いろいろな人によって描かれた芭蕉と芭蕉庵がパネルで展示されている。芭蕉像は、夕方になると隅田川の方へ向きを変え、行き来する船を見守る。

▼展望庭園の松尾芭蕉像

▼隅田川沿いの遊歩道には、芭蕉の句碑が点在する

八 芭蕉稲荷

芭蕉庵跡地にある神社

史跡庭園の石段を下りると、左手に芭蕉稲荷がある。かつてこの地に、松尾芭蕉が庵を結んでいたという。

松尾芭蕉は、36歳のときに門人の杉山杉風の紹介で、深川の庵に移り住んだ。静かな田園地帯であったこの地を気に入り、ここで「古池や　蛙飛びこむ　水の音」などの名句を数多く残した。芭蕉と称するようになったのも、庵の庭に一株のバショウがあり、人々から芭蕉庵の翁と呼ばれていたからだという。

元禄7（1694）年に芭蕉が亡くなり、庵跡は摂津尼崎藩主松平遠江守の屋敷に接収された。泉岳寺へと向かう浪士たちがこの付近を通過したのは、その8年後のこと。芭蕉庵はまだあったのだろうか。

新大橋から芭蕉稲荷の間に、江東区芭蕉記念館（電話 03 - 3631 - 1448／9：30～17：00（入館は16：30まで）／月休／100円）もあり、芭蕉の肖像画や手紙、短冊などが展示されている。

▲芭蕉稲荷

▼深川神明宮

九 深川神明宮

深川発祥の地

万年橋通りを両国駅方面に向かい、芭蕉記念館の手前を右に曲がってしばらく行くと深川神明宮がある。ここは、深川発祥の地として知られている。

深川の開発は、摂津国出身の深川八郎右衛門とほか数人が新田を開拓したことに始まる。深川神明宮のある辺りは八郎右衛門が住みついたとされている場所で、神社も彼が建立したという。

深川に伝えられている、地名にまつわるエピソードによれば、徳川家康が鷹狩のためにこの地を訪れたとき、まだ地名はなかった。そこで家康は、八郎右衛門の名字を村名にするよう命じたといわれている。